

〔書評〕

須藤圭著 『狭衣物語 受容の研究』

加藤 昌 嘉

『狭衣物語』は、平安時代の作り物語の中では、『源氏物語』と並ぶほどよく出来た、面白い作品です。にもかかわらず、これまで一度も文庫化されたことがなく、作家による現代語訳やマンガも存在しません。『狭衣』が、一般にほとんど流布していないのは、実に残念なことだと言わざるを得ません。研究者による啓蒙活動が不足しているからでしょうか？ 先行の和歌や漢詩を知らないで理解できない文章が多いからでしょうか？ 写本によつて本文が大きく異なるからでしょうか？ よくわかりません。

しかし、『狭衣』は、平安・鎌倉・南北朝・室町・江戸時代を通して、さまざまに読まれ、さまざまに受け継がれて来ました。多くの写本が作られ、絵画化され、和歌を詠む際の参考書にされ、注釈書が作られ、お伽草子にされ、能にされ、版本が刊行され……、といったごとく、『伊勢物語』『源氏物語』に次いで重要視されていたようです。現代人が知る『竹取物語』や『とりかへばや物語』などより、遙かに深く読まれ、遙かに広く流布していたようです。

そんな『狭衣』を取り上げ、その〴〵受け入れられ方の種々相を辿ったのが、須藤圭氏の『狭衣物語 受容の研究』です（新典社、二〇一三年一〇月刊）。本書の柱は、『狭衣』の、①歌集 ②注釈 ③本文 の三つです。

▼第一章 狭衣物語歌集の諸相では、『狭衣』の中の和歌を抜き出して作られた『狭衣歌集』を考察しています。

「第一節 狭衣物語歌集の成立と展開」は、『明月記』『順徳院御記』など諸資料をもとに、鎌倉時代、『狭衣』の和歌を抜き出し編纂する営みがあったことを明らかにしています。ただし、『狭衣物語』の「歌書」としての位置づけが、源氏物語の和歌を超越してしまうほどの評価を含有するものであった（五一頁）とあるのは、筆が滑ったのでしょうか。歌人たちが重視した「物語」としては、まず『伊勢物語』『大和物語』そして『源氏物語』があり、その次に『狭衣』……という把握をすべきではなかったか、と思う所です。

「第二節 『類句和歌』の狭衣物語所収歌」は、前半で、『類句

和歌集』(勅撰和歌集や物語から和歌を抜き出しイロハ順に並べたもの)を概説し、後半で、三条西実隆の『狭衣』享受の様相を辿っています。三条西実隆は、【A】『狭衣』の本文校合を行い、【B】写本を作成し、【C】謡曲『狭衣』を作り、【D】『類句和歌集』の書写・作成にかかりましたが、しかし、【D】と【B】【C】の『狭衣』本文を比較すると、ピタリと合致せず、接点が見出されない、とのこと。それゆえ、論の後半は、錯雑としています。『類句和歌集』の問題を、何とか『狭衣』諸本の本文異同の問題に結びつけようと苦勞したと目されます。なお、タイトルは、『類句和歌』所収の狭衣物語歌」とすべきでしょう。

【第三節 伝尊鎮法親王筆『さころもの哥』】は、青山会文庫と河野美術館が蔵する『狭衣歌集』を紹介し、通行の解釈とは異なる読みがなされてきたと説いています。

【第四節 鷹司信房筆『さころもの哥き、書』】は、宮内庁書陵部が蔵する『狭衣歌集』を紹介し、通行の解釈とは異なる読みがなされてきたと説いています。

【第五節 近衛信尹外題筆『さ衣之集詞』】は、陽明文庫が蔵する『狭衣歌集』を紹介し、連歌師たちの間で成った『狭衣』本文との関係性を説いています。

【第六節 『古今類句』の狭衣物語所収歌】は、『古今類句』(勅撰和歌集や物語から和歌を抜き出しイロハ順に並べたもの)を概説し、その本文が、現存『狭衣』諸本のうち伝為明本に近いことを説いています。そして、飛鳥井雅章がそこに関わったと想定し

ています。なお、タイトルは、『古今類句』所収の狭衣物語歌」とすべきでしょう。

▼【第二章 狭衣物語注釈の諸相】では、『狭衣』の注釈書を考察しています。

【第一節 『狭衣三箇秘訣切紙』の方法】は、江戸時代、松永貞徳の周辺で伝授されたとおぼしい『狭衣三箇秘訣切紙』を紹介する論稿です。『源氏物語』を法華經に、『狭衣』を涅槃經になぞらえる記述が見られ、驚かされます。論の後半は、『狭衣』における涅槃經の問題にスライドしてしまっていて残念です。『狭衣三箇秘訣切紙』がどういうコンセプトで成ったテキストなのか、どうしてこのような不思議なテキストを必要としたか、という問題に切り込んでほしかった、と思いました。

【第二節 切臨の解釈一面】は、承応三年版本『狭衣』の傍注に着目する論稿です。版本傍注と版本下紐が、「よそながら……」歌の詠み手を、宰相中将妹君ではなく狭衣であると記していることを問題にしています。そして、それは一つの「読み」であったと説いています。それは領けるとしても、ただ、タイトルを「切臨の解釈」としてよかったのかどうか、疑問が残りました。

▼【第三章 狭衣物語本文の諸相】では、『狭衣』の写本・版本を取り上げ、その本文を考察しています。

【第一節 京都大学文学研究科蔵『さころもの』の和歌の異文と空間】は、京大五冊本『狭衣』に見える「むかいの岡」という表現を論じています。それは「一品宮を想起させ」さらに「宰相中

将妹君も思い起す叙述」だと言います。ただ、「むかいの岡にかりせしや君」という和歌中、どうして「岡」を或る人物の譬喩と考へなくてはならないのか、よくわかりませんでした。

「第二節 卷四飛鳥井女君詠二首の異文」は、『狭衣』巻四の或る場面に着目し、諸本間で、二首の和歌が逆順になっていたたり、二首とも存在していなかったりするという問題を取り上げています。そして、猪苗代兼寿や里村紹巴が、その二首を欠く本文をそのまま撰取していたことを重視しています。ただし、それが、熟考された末の判断だったのか否か、疑問なしとしません。それは、『狭衣』の問題では、もはや、ありません。

「第三節 狭衣物語古筆切の一樣相」は、伝阿仏尼筆の『狭衣』の断簡を読み解くものです。現存諸本とはいささか異なる本文が鎌倉時代に存在し、それが江戸時代の版本の本文に近い傾向を持つことを明らかにしています。本書で唯一、『狭衣』の物語本文そのものを分析する論稿です。今後この方向で研究を進展してほしい、と切に思いました。

* * *

本書を通読して思ったことを簡条書きにします。

・須藤氏は、『狭衣歌集』や『類句和歌集』を調査し、それらがどのような『狭衣』本文に依拠したかをまず調査するのですが、結局、いつも、「これ」という特定の一本には辿り着けな

い、ということを私は知りました。そのとき、須藤氏は、『狭衣歌集』を作った人々が、『狭衣』を読み込み、他とは異なるユニークな解釈を反映させた、と言う（そして、それを「受容の一端」と言う）のですが、過剰評価（最良の引き倒し）ではないか、と思いました。

・須藤氏は、『狭衣』の和歌を抜き出して収めた作品を複数紹介しており、私には勉強になりましたが、『狭衣』の問題だけ考察するので、全体像が見えませんでした。勅撰和歌集の享受、『伊勢物語』の享受、『源氏物語』の享受があり、その傍らに『狭衣』の享受があつたはずで、いいたい、それがどのくらいのパーセンテージを占めているのか示してほしい、と思いました。『伊勢物語』撰取の種々相・『源氏物語』撰取の種々相と、性質を同じくするのか、異質なのか。他の物語享受と同時に考察する必要があると思いました。

・須藤氏が考察の対象とするのは、『狭衣』の和歌ばかりです。どうして、地の文・発話文・心内文の異文（あるいは受容）をもっと分析しないのでしょうか。木を見て森を見ずだ、と思いました。

・須藤氏が、『狭衣』そのものに切り込んだのは、唯一、『第三章』の「第三節 狭衣物語古筆切の一樣相」だけです。振り返ると、本書の《はじめに》では、研究の目的が、次のようにまとめられていました。

本文に秘められた文脈を探り、主題のあらわれを見いだすこ

とや、構想や構造、記述の巧みさを論じることではなく、時代
 ことの読まれ方、受けいれられ方の諸相を解き明かし、文学
 が呼び起こしてきた思考を明らかにすることで、狭衣物語が
 もつ文芸性や本質へと迫ることにある。(一一頁)

最後の「狭衣物語がもつ文芸性や本質へと迫ること」には、ま
 だ到達できていないようです。『伊勢物語』研究然り、『源氏物
 語』研究然り、『とりかへばや』研究然り、享受史研究は、歌人
 や連歌師や国学者の研究になりこそすれ、物語研究たり得ない、
 という怖さを感じています。おそらく、本文か絵を対象にすれ
 ば、その危険を回避できるだろう（つまり、物語そのものの研究
 になるだろう）、と思っています。

* * *

ちなみに、本書によって、須藤氏は、第三回池田亀鑑賞を受賞
 されました。以下のホームページを参照: http://www.shintensha.co.jp/sp/ikedai_kikan/award2013.html
 (新典社 二〇一三年一〇月二五日発行 A5判四〇四頁 本体
 価格一一五〇〇円)

(かとう・まさよし 法政大学教授)